

19 世紀イタリア語における 修飾語に関する一考察

— *stesso/medesimo, qualche/alcuno, tutto* —

上 野 貴 史

1. はじめに

1970 年代に、ようやく制度として国語統一が行われたイタリア語は、概略、書き言葉においては、14 世紀のボッカッチョ (*Giovanni Boccaccio*: 1313-1375) の散文である『デカメロン』の文体を基本とし、その後 19 世紀におけるマンゾーニ (*Alessandro Manzoni*: 1785-1873) の言語理論により、共通イタリア語が形成されるに至っていると言える。歴史的に見れば、ある意味で、16 世紀末には、イタリア半島において共通語が確立していたとも考えられるが、このような共通語としてのイタリア語は、ある特定の目的のために使用されるものであり、一般の人々が通常使用する各種方言などとは、かなり乖離していたものと思われる。このような中で、19 世紀のイタリアは、前世紀にフランスやイギリスの啓蒙主義文化に触れ、ナポレオンのイタリア支配などからフランス語の影響を被る反面、これに反発する国語純粋主義 (*purismo*) の傾向を受けながら、国家統一を迎える変革の時代である。特に、国家統一という歴史的出来事は、言語においても国語統一という問題が再燃し、イタリア語史においても重要な時代と思われる。

現代イタリア語でも同様であるが、イタリア語における語順というものは、文のレベルにおいても、句のレベルにおいてもかなり柔軟性があるように思える。特に、名詞句内部の語順は、品質形容詞が名詞を前から修飾するのか、それとも後ろから修飾するのか、ということは、意味が変わるものから、ほとんど意味の変化のないものまで、学習者にとっては、頭を悩ますものの一つである。また、主に、名詞の前に置かれる修飾語とされる不定形容詞や所有形容詞などが、複数個現れる場合の統語関係に関しては、文法書などにおいてほとんど記述がないような状態である。そこで、本稿では、19 世紀前半のイタリア語をデータとして、名詞句の統語構造を簡潔に示し、その幾つかの修飾語に関して、分析を加えていきたいと思う。本稿で扱うデータとしては、ジャコモ・レオパルディ (*Giacomo Leopardi*: 1798-1837) によって 1824 年から 1832 年の間に書かれた *Operette Morali* 『道徳小論』(以下、OM と略す) と、1817 年から 1832 年の間にわたる読書と追憶の対話ノートである『ジバルドーネ』(*Zibaldone*) の焼き直しとして書かれた (*Pensieri*) 『思想』(以下、PE と略す) を取り上げる¹⁾。この他、19 世紀と他の時代を比較するために、14 世紀のボッ

カッチオの『デカメロン』の第一日目と第二日目の部分、そして現代語としてカルヴィーノの『宿命の交わる城』(Il castello dei destini incrociati)をデータとして取り扱うことにする。

2. 名詞句

まず本稿では、イタリア語名詞句の統語構造を(1)のように設定する。

(1) NP : PreM1 + PreM2 + PreM3 ... + N + PostM1 + PostM2 + PostM3 ...

(1)は、前位修飾部を PreM で示し、それが幾つかの統語位置を占め、そして主要部である名詞 N、さらにそれに続く後位修飾部 PostM が幾つか連続する、ということを示している。このような名詞句における出現位置については、それぞれの修飾語が共起するか否かにおいて、一定の規則があると考えられる。修飾語がどの統語位置を占めるかを明らかにするために、冠詞・指示形容詞・所有形容詞・数形容詞²⁾・不定形容詞が、名詞の前位に現れるか、後位に現れるかを調査したものが<表1>である。

<表1：修飾部の統語位置>

修飾語の種類		PreM	PostM
冠詞		○	×
指示形容詞		○	×
所有形容詞		○	○
数形容詞		○	△
不定形容詞	不定形容詞	○	×
	alcuno「幾つかの」	○	△
	nessuno「どんな～ない」	○	△
	qualsivoglia「どの～でも」	○	△
	tale「ある」	○	△
	veruno「どんな～ない」	○	△

<表1>の中の○の記号は、出現するもの、×は、出現しないもの、△は、わずかであるが出現を許すものを示している。この中で、冠詞と指示形容詞は、例外なく前位修飾する。所有形容詞は、頻度的には前位修飾の方が優勢であるが、後位修飾もかなりの頻度で見られる³⁾。よって、PreMとPostMの両方に、○の記号を使用している。数形容詞は、原則、前位修飾であるが、(2)のように、基数形容詞が序数詞的な機能をする場合に限り、後位修飾の例が見られる。

(2) l'anno ottocento trentatremila dugento settantacinque 「833,275年」(OM,663:1)⁴⁾

不定形容詞は、基本的に前位修飾となる。不定形容詞の中で後位修飾部に現れるものとして、alcuno/ nessuno/ qualsivoglia/ tale/ verunoがある⁵⁾。後位修飾を許す不定形容詞は、後位修飾部に現れた場合、前位修飾とは異なった意味を示す。例えば、alcuno/ nessuno/ tale/ verunoが後位修飾部に現れると、前位修飾と比較してやや強調的な表現となる。

(3) senza timore alcuno 「全く不安なく」(OM,878:114)

また、qualsivogliaが後位修飾部に現れると、軽蔑的なニュアンスが示される。

(4) nelle persone di un luogo o di un tempo *qualsivoglia*

「いかなる場所や時間の人の中においても」(OM,773:34)

次に、名詞句に出現する修飾語の共起関係から統語位置を分析すると、<表2>のような結果が得られる。

<表2：名詞句の統語構造>

統語構造	出現語類
PreM1	tutto「すべての」
PreM2	冠詞類(定冠詞/不定冠詞/指示形容詞)
PreM3	alcuno/ alquanto「多少の」/ altrettanto「同程度の」/ certo「幾らかの」/ ciascheduno「各々の」/ ciascuno「それぞれの」/ diverso「色々な」/ medesimo「同じ」/ molto「多くの」/ nessuno/ niuno/ ogni「どの〜も」/ parecchio「かなり多くの」/ poco「少量の」/ qual si sia/ qualche「幾つかの」/ qualsivoglia/ qualunque「どんな〜も」/ stesso「同じ」/ tanto「たくさん」/ troppo「過度の」/ vario「色々な」/ veruno
PreM4	数形容詞
PreM5	altro「他の」
PreM6	所有形容詞
PreM7	medesimo「〜自身」/ stesso「〜自身」/ proprio「〜自身」
PreM8	così fatto/ cotale「かかる」/ si fatto/ tale「とある」
PreM9	品質形容詞
N	名詞
PostM1	所有形容詞
PostM2	medesimo「〜自身」/ stesso「〜自身」/ proprio「〜自身」
PostM3	alcuno/ così fatto/ nessuno/ qualsivoglia/ tale/ veruno
PostM4	品質形容詞

<表2>では、PreM1の tutto から PreM9の品質形容詞までの前位修飾部に続いて、主要部である名詞 N、そして、後位修飾部として PostM1の所有形容詞から PostM4の品質形容詞までによって、名詞句が構成されることを示している。Mの後の数字は、出現順序を示している。例えば、PreM2の定冠詞は、tutto を名詞句にとる場合、必ず、<tutto+定冠詞+...>という語順になる。また、同じ修飾部に属するものは、絶対に共起しないことを同時に意味する。例えば、定冠詞と指示形容詞は、同じ PreM2 に属しているということから、これらは、同一の名詞句において共起することはない⁶⁾。

修飾部における使用形態に関して、19世紀特有なものとしては、(5)のようなものがみられる。

(5) così fatto (cosiffatto)「そのような」/ si fatto (siffatto)「そのような」/ qual si voglia (qualsivoglia)「どの〜でも」/ qual si sia (qualsiasi)「どの〜でも」/ niuno (nessuno)「どんな〜ない」/ veruno (nessuno)「どんな〜ない」

(5)の中で、括弧で示したものは、現代イタリア語で一般的に使用される形態を示している。così fatto/ si fatto/ qual si voglia/ qual si sia は、現代語では、結合した形態が使用されるのに対して、レオパルディの作品では分離した形態が使用されている。また、現代イタリア語では、nessuno が用いられるところで、niuno や veruno の使用が見られる。

3. 修飾部

ここでは、2.で考察した名詞句に現れる修飾部の中で、レオパルディの作品で特徴的に使用されていると思われる *stesso/ medesimo*, *qualche/ alcuno*, *tutto* を取り上げて分析を進めていく。

3.1. *stesso* と *medesimo*

一般的に、指示形容詞に分類される *stesso* と *medesimo* は、現代イタリア語では、*stesso* の方が一般的な語彙として使用され、*medesimo* は、文学調の語彙とされる⁷⁾。このことに関して、14世紀のボッカッチョと19世紀のレオパルディ、そして現代語としてカルヴィーノのデータから、それぞれの使用頻度の調査を行ったものが<表3>である。

<表3: *stesso* と *medesimo* の使用頻度>

作品	<i>stesso</i>	<i>medesimo</i>
Boccaccio	23 例 (27.4%)	61 例 (72.6%)
Leopardi	165 例 (54.5%)	138 例 (45.5%)
Calvino	51 例 (94.4%)	3 例 (5.6%)

これら二つの語彙の使用頻度の調査から、現代語に近づくにつれ、*stesso* の使用が高まっていることが分かる。現代語であるカルヴィーノの結果からは、文法書に記されているような *stesso* の一般的な使用が確認されるが、19世紀においては、*stesso* と *medesimo* の使用頻度がほぼ同じであり、*stesso* の優位は特に認められない。一方、ボッカッチョの時代では、*medesimo* の方が一般的な語彙として使用されている。

また、このような二つの語彙は、一般的には、名詞に前置されると指示形容詞として、「同じ～」という意味（指示用法）を示し、名詞に後置されて「まさに～、～自身」という意味（強意用法）を持つ。また、代名詞の直後に置かれて「～自身」という意味を示すことがある。

(6) a) <冠詞類+*stesso/ medesimo*+N> 「同じ～」

Dici sempre le *stesse* cose. 「君は常に同じことを言う」(Serianni (1989:285))

Abbiamo le *medesime* idee. 「我々は同じ考えを持っている」

(Dardano & Trifone (1985:141))

b) <冠詞類+N+*stesso/ medesimo*> 「まさに～、～自身」

Mi ha dato il libro *stesso*. 「彼は僕に他ならぬその本をくれた」

(Lepschy & Lepschy (1988:128))

Il presidente *medesimo* si congratulò con loro. 「大統領自ら彼らを祝った」

(Dardano & Trifone (1985:141))

c) <代名詞+ *stesso/ medesimo*> 「～自身」

Gliel'ho detto io *stesso/ medesimo*. 「私自身が彼にそれを言った」

(Dardano & Trifone (1985:141))

stesso と *medesimo* におけるこのような統語と意味の関係が、レオパルディの作品におい

て有効であるかどうかを調べたものが<表4>である。

<表4: *stesso* と *medesimo* の統語構造と意味>

修飾位置	統語構造	<i>stesso</i>		<i>medesimo</i>	
		指示	強意	指示	強意
PreM	<冠詞類+X+(品質形容詞)+名詞+(品質形容詞)>	48例	25例	35例	6例
	<冠詞類+X+所有形容詞+名詞>	-	2例	-	-
	<冠詞類+所有形容詞+X+名詞>	-	1例	-	-
	合計	48例	28例	35例	6例
PostM	<冠詞類+名詞+X>	6例	18例	5例	8例
	<冠詞類+名詞+所有形容詞+X>	-	1例	-	-
	<冠詞類+所有形容詞+名詞+X>	-	-	-	1例
	<代名詞+X> ^{b)}	-	64例	-	83例
	合計	6例	83例	5例	92例

<表4>の統語構造におけるXは、*stesso* か *medesimo* の何れかが挿入されることを意味している。これらの形容詞が前位修飾部に現れる場合の指示用法と強意用法の割合は、*stesso* の指示用法が48例で63.2%、強意用法が28例で36.8%、一方、*medesimo* は、指示用法が35例で85.4%、強意用法が6例で14.6%となる。これらの形容詞が前位修飾部に現れる場合の指示用法の優位は認められるものの、かなりの頻度で強意用法も使用されていることが分かる。

(7) *avendo a rifare la stessa vita*

「同じ人生をもう一度送らなければならなくて」(OM,896:36)

(8) *di essere quasi contenti della stessa vita*

「人生そのものにほぼ満足していること」(OM,596:419)

(7)と(8)は、いずれも *vita*「人生」が主要部として現れているが、(7)は指示用法、一方、(8)は強意用法として使用されている。前位修飾部に現れる *stesso* の強意用法は、かなりの頻度で許される(36.8%)。一方、*medesimo* が前位修飾部に現れて強意用法をとる場合は、かなりの制限が見られる(14.6%)。強意用法で用いられている6例を分析すると、6例中5例の冠詞類が指示形容詞となっている。

(9) *questa medesima età*「まさにこの時代」(OM,722:42)

また、主要部である名詞は、すべて「時間」もしくは「場所」を意味するもので構成されている。

(10) *quel medesimo tempo*「まさにその時」(OM,667:106)

このようなことから、前位修飾部に現れる *medesimo* は、冠詞類に指示形容詞が現れることが多く、主要部に「時間・場所」を意味する名詞が出現する場合に強意用法として機能することが指摘できると思われる。

stesso と *medesimo* が後位修飾部に出現する場合の指示用法と強意用法の割合は、主要部が代名詞の場合を除くと、*stesso* の指示用法が6例で24.0%、強意用法が19例で76.0%、一方 *medesimo* は、指示用法が5例で35.7%、強意用法が9例で64.3%となっている。こ

これらの形容詞が後位修飾部に出現する場合の強意用法の優位は認められるが、かなりの頻度で指示用法の使用が見られる。特に、冠詞類に不定冠詞が出現する場合は、必ず指示用法として使用される。

(11) *un'opera stessa* 「同一の作品」(OP,731:85)

また、主要部に「時間」を意味する名詞が出現する場合の指示用法の使用も多く見られる。⁹⁾

(12) *nel tempo stesso* 「同時に」(PE,1119:2-7)¹⁰⁾

代名詞が主要部となる場合は、*stesso* と *medesimo* のいずれも強意用法を示す。

stesso と *medesimo* のレオパルディの作品における使用に関して、① *stesso* と *medesimo* が、ほぼ同じ頻度で使用されていること、②前位修飾部に出現する場合、指示用法、後位修飾部に出現する場合、強意用法であるという傾向は見られるが、必ずしもこのような統語位置と意味が対応していないこと、③<不定形容詞+名詞+*stesso/ medesimo*>の統語連続で出現する場合は、指示用法となること、④主要部に「時間・場所」を意味する名詞が出現する場合、前位修飾部や後位修飾部に拘わらず、指示用法と強意用法に揺れが見られること、を指摘することができる。

3.2. *qualche* と *alcuno*

qualche と *alcuno* は、統語構造により、(13)のような異なる意味を示す。

(13) a) *qualche*+単数名詞 「幾つかの～，幾人かの～」

b) *alcuni/e*+複数名詞 「幾つかの～，幾人かの～」

alcuno/a+単数名詞 i) 肯定文：「何らかの～，幾らかの～」

ii) 否定文：「何一つ」

単数名詞+*alcuno/a* 「(否定文において) 何一つ」

alcuni/e は、複数名詞を従える場合に、*qualche* とほぼ同じ意味を示し、現代イタリア語では、*qualche* の方が、直接的で一般的な語彙とされる。一方、*alcuni/e* は、気取った書き言葉で使用される語彙とされる¹¹⁾。このように類似した意味を持つ *qualche* と *alcuni/e* に関して、その使用頻度を調査したものが<表5>である。

<表5： *qualche* と *alcuni/alcune* の使用頻度>

作品	<i>qualche</i>	<i>alcuni/alcune</i>
Boccaccio	3例(11.5%)	23例(88.5%)
Leopardi	144例(76.2%)	45例(23.8%)
Calvino	8例(88.9%)	1例(11.1%)

14世紀のボッカッチョの作品では、*qualche* が 11.5%、*alcuni/e* が 88.5%と、*alcuni/e* の使用頻度が非常に高い結果となったが、現代語のカルヴィーノにおいては、反対に、*qualche* が 88.9%、*alcuni/e* が 11.1%と *qualche* が、高い頻度で使用されていることが分かる。19世紀のレオパルディにおいては、*qualche* が 76.2%、*alcuni/e* が 23.8%と現代語と同様、かなり *qualche* の使用頻度が高くなっている。

Serianni(1989)は、alcuni/e が主に書き言葉で使用されるということを実証するために、マンゾーニの *Il promessi sposi* 『婚約者』において、alcuni/e が対話部分でどの程度出現しているかを調べている。そして、53 例の alcuni/e の使用の内、対話部分で用いられているものが、1 例しかないというデータを示し、19 世紀においても、alcuni/e が書き言葉の語彙であることを指摘している。このような指摘が、レオパルディの作品において有効であるかどうかを調べたものが<表 6>である。

<表 6: qualche と alcuni/e の対話出現率>

作品	形態	総数	対話	対話出現率
Manzoni	alcuni/ alcune	53 例	1 例	1.9%
Leopardi	alcuni/ alcune	45 例	15 例	33.3%
	qualche	144 例	50 例	34.7%

レオパルディにおいては、45 例の alcuni/e の内、15 例が対話部分で使用されており、alcuni/e の対話での出現率は、33.3%と、マンゾーニにおける調査の 1.9%と比較すると、かなりの差が見られる。これは、qualche のもの(34.7%)とほぼ同じ数値を示していることから、Serianni(1989)の alcuni/e が書き言葉の語彙であるというような指摘は、レオパルディの作品に関しては有効でないことが分かる。

レオパルディにおける qualche と alcuno に関しては、① qualche が、一般的な使用としてすでに確立していること、② alcuni/e は、qualche と同様、書き言葉以外でも使用されること、が指摘できる¹²⁾。

3.3. tutto

一般的に、不定形容詞 tutto は、(14)で示したように、<tutto+冠詞類+名詞>という統語構造をとり、「全体の～」という意味を示す。

(14) Hai mangiato *tutti* i biscotti. 「君はビスケットすべてを食べた」(Sensini(1997:169))
ここでは、(14)の統語構造を逸脱するようなものに関して、若干の考察を行うことにする。

Serianni(1989:300)には、"Nell'italiano antico *tutto* poteva fare a meno dell'articolo, in particolare se accompagnato da un possessivo. 「古いイタリア語において tutto は、特に所有形容詞を伴う場合において、冠詞なしで済ますことができる」という記述がみられる。そこで、特に tutto の所有形容詞を伴う構造に絞って、冠詞類の有無を調査したものが<表 7>である。データには、ボッカッチョ、レオパルディ、カルヴィーノの他、古浦(2000)から、散文である *Le cento novelle antiche* 『古譚百種』を使用した。

<表 7: tutto の所有形容詞を含む構造における冠詞類の有無>

作品	<tutto+Φ+所有形容詞+N>	<tutto+冠詞類+所有形容詞+N>
古譚百種	5 例	6 例
Boccaccio	-	14 例
Leopardi	-	17 例
Calvino	-	5 例

13 世紀の『古譚百種』では、所有形容詞を含む構造で、無冠詞と冠詞類の使用がほぼ同

数で用いられており、この時代の冠詞の有無に揺れがみられる。ところが、14世紀のボッカッチョを含めて、13世紀以外の時代においては、*tutto*の所有形容詞を含む構造における冠詞類の使用は、義務的となっていることが分かる。

所有形容詞を含まない場合に見られる *tutto* の無冠詞の構造は、現代イタリア語を含めて、すべての時代に見られる。19世紀前半のレオパルディの作品においては、*tutto* を含む構造 297例の内、名詞の部分が人称代名詞や指示代名詞のように冠詞を必要としないものや数詞を除くと、無冠詞の統語構造は、(15)に示した19例みられる。

(15) *tutti bambini/ tutte bestie/ tutto di (4)/ tutto giorno (11)/ tutta lena/ tutta sincerità*

(15)の例の後ろの括弧は、出現した頻度数を示している。現代イタリア語において、Fogarasi (1983:222)は、(16)で示したように、無冠詞の構造は、慣用的な表現、もしくは、主要部に冠詞を必要としない固有名詞が出現する場合のどちらかであることを指摘している。

(16) a) 慣用的表現 *di tutto cuore* 「心から」 / *tutta notte* 「毎晩」

b) 固有名詞 *tutta Firenze* 「フィレンツェ中」

主要部である名詞部分に固有名詞が現れる例は、レオパルディの作品には、全く見られないので、Fogarasiの説明だけに頼ると、レオパルディに見られる無冠詞の構造は、すべて慣用的表現ということになる。(16)で示した慣用的表現には、*di tutto cuore*のように、前置詞を伴ってイディオムとして使用されているものと、*tutta notte*のように、文レベルで副詞句の役割を果たすものの二種類がみられる。(15)で示したレオパルディの例にも、同様のものがみられる。まず、前置詞を伴ってイディオムとして使用されているものは、*a tutta lena* 「全力で」(OM,711:114)と *con tutta sincerità* 「率直に」(OM,804:12)の2例である。一方、文において副詞句の働きをするものとしては、*tutto di* 「毎日」と *tutto giorno* 「毎日」がある。

(17) *La ragione dell'uomo non è sottoposta tutto giorno a infiniti accidenti?*

「人間の理性というもので、無限の災難を日々逃れられないものだろうか」

(OM,780:118~119)

(17)における *tutto giorno* は、名詞句としてではなく、時を表す副詞として動詞 *è sottoposta* を修飾している。これが、名詞句として機能する場合、(18)のように、冠詞類を必要とする。

(18) *per tutto il giorno seguente* 「翌日ずっと」(OM,695:70)

(18)の *tutto* 以下は、前置詞 *per* の目的語として機能し、名詞句となるため、定冠詞 *il* を必要としている。

以上のような慣用表現以外にも、レオパルディには、*tutto* の無冠詞の構造がみられる。

(19) *E per questo non saranno già tutte bestie gli abitatori tuoi.* (OM,652:52)

「このために君のところの住人が完全に野獣にならなかったのだな」

(19)における *tutte bestie* は、慣用表現とは言えないものである。ここでの *tutte* は、「一つ

残らず」とか「すべての」という不定形容詞としての意味ではなく、*bestie* を強調するために、「完全に、まるで」という意味で用いられている。これは、(20)で示した *tutto* の副詞的用法と類似した働きと言える。

(20) *Era tutta felice*. 「彼女は幸せいっぱいだった」

(20)の *tutta felice* の *tutta* は、後続の形容詞 *felice* を強調しているものである。不定形容詞 *tutto* は、現代イタリア語においても副詞的用法として、(20)のような構造を持つが、レオパルディでは、主要部が名詞の場合においても、副詞的用法の意味で用いられている。

レオパルディにおける *tutto* の使用に関しては、①所有形容詞を含む構造での無冠詞の用法が消失していること、②無冠詞の用法は、a) 主要部が代名詞、b) 主要部が数詞、c) イディオム、e) 副詞的機能、f) 副詞的に名詞を修飾、のいずれかであること、が指摘できる。

4. 結語

以上、19世紀前半の二つの散文をデータとして、名詞句の構造と、それに含まれる修飾部の幾つかの特徴を分析してみた。文学言語を基盤として成立しているイタリア語にとって、この時代は、手本となる古いイタリア語を踏襲しようとしながらも、新しい流れに逆らえないといったようなものが伺える。それは、19世紀前半に特有な形態や統語構造がみられる一方で、かなりの部分、現代イタリア語と同一のものが含まれていることから理解できる。今後は、他の時代の名詞句の比較・考察を通じて、現代イタリア語に至る過程と、その中での19世紀イタリア語の位置づけを明らかにしていきたいと考えている。

* 本稿は、平成13年9月8日、大阪学院大学で開催された第31回西日本言語学会において「19世紀イタリア語の名詞句構造」と題して口頭発表を行ったものに加筆・修正を施したものである。

引用文献

Opere di Giacomo Leopardi. 1977. Classici UTET.

Decameron di Giovanni Boccaccio. 1956. Classici UTET.

Il castello dei destini incrociati. Italo Calvino. 1973. Einaudi.

註

- 1) 作品中に現れる韻文と他の作品からの引用部分は、データから除外する。
- 2) 数形容詞は、一般的に、基数形容詞・序数形容詞・倍数形容詞に分類される。序数形容詞と倍数形容詞は、統語的に品質形容詞と同じ位置に出現するので、ここで取り上げている数形容詞とは、基数形容詞だけを指している。
- 3) データとして用いたレオパルディの作品においては、前位修飾が1000例に対し、後位修飾が218例みられた。
- 4) (OM,663:1)は、作品名(OM)、ページ(663)、行数(1)を示す。
- 5) 後位修飾の頻度は、*alcuno* が全出現数191例中55例、*nessuno* が77例中2例、*qualsivoglia* が16例

中 2 例, tale が 147 例中 55 例, veruno が 4 例中 2 例であった。

- 6) <表 2 >に示した名詞句の統語構造を見ると, さも一つの名詞句に多くの修飾語が連続するように見えるが, 実際には, 一つの名詞句には, 修飾語は多くて 4 つくらいまでしか現れない。また, PreM1 の tutto と PreM3 の不定形容詞が, 同時に出現することはないし, PreM3 の不定形容詞の多くが PreM2 の冠詞類と共起することもない。この理由としては, 統語的というよりも意味的な制限の存在が考えられるが, このことに関してはここでは触れないでおく。<表 2 >で示した統語構造は, 単に線状的に現れる統語順序だけを示しているに過ぎない。つまり, 実際の名詞句では, ほとんどの修飾部は, 空になっているということになる。ただし, これらが出現する場合, <表 2 >のような順序で現れる。
- 7) Dardano & Trifone(1985:141), Fogarasi(1983:218), Rohlf's(1968:209-210), Sensini(1997:163-164)を参照のこと。
- 8) cotesto medesimo「その同じこと」(OM,714:231)などは, 指示形容詞 cotesto「その」と指示代名詞 medesimo「同じこと」の統語連続とみなし, ここでは扱わない。
- 9) stesso と medesimo が後位修飾部に現れる場合の指示用法において, 11 例中 6 例が主要部に「時間」を意味する名詞が使用されている。
- 10) (PE,1119:2-7)は, 作品名(PE), ページ(1119), 章(2), 行数(7)を示す。
- 11) Dardano & Trifone(1985:143-144), Fogarasi(1983:220), Serianni (1989:288-282)を参照のこと。
- 12) この他, <alcuno/a+単数名詞>が肯定的な意味(「幾らかの」)で用いられることは, 現代語では, 非常にまれである(Serianni (1989:291))とされるが, レオバルディの作品では, この統語構造で用いられている 88 例のうち, 51 例が肯定文で用いられている。alcuna mutazione「何らかの変化」(OM, 580:18)。一方, <単数名詞+alcuno/a>の統語構造では, 55 例中 52 例が否定文で用いられている。また, <qualche+複数名詞>の統語構造は, 19 世紀前半に使用が減少する(Migliorini (2000:565))とされるが, レオバルディの作品には 1 例だけ見られる。qualche paracalunni「幾つかの擬似的中傷」(OM, 618:27)。

参考文献

- Dardano, Maurizio & Pietro Trifone. 1985. *La lingua italiana*. Zanichelli.
- Fogarasi, Miklós. 1983. *Grammatica italiana del novecento: Sistemazione descrittiva*, 2nd ed. Bulzoni Editore.
- Lepschy, Anna Laura & Giulio Lepschy. 1988. *The Italian Language Today*, 2nd ed. New Amsterdam.
- Migliorini, Bruno. 2000. *Storia della lingua italiana*, 8th ed. Bompiani.
- Rohlf's, Gerhard. 1968. *Grammatica storica della lingua italiana e dei suoi dialetti: Morfologia*, Traduzione di Temistocle Franceschi. Piccola Biblioteca Einaudi.
- Sensini, Marcello. 1997. *La grammatica della lingua italiana*. Oscar Mondadori.
- Serianni, Luca. 1989. *Grammatica italiana: Italiano comune e lingua letteraria*. UTET.
- 古浦敏生. 2000. 「十三世紀イタリア語文法研究:『小宝庫』と『古譚百種』を資料として」. 広島大学文学部紀要 第 60 巻特輯号 4.